

マイノリティの「理解」と コミュニケーション

三木那由他(大阪大学大学院人文学研究科)

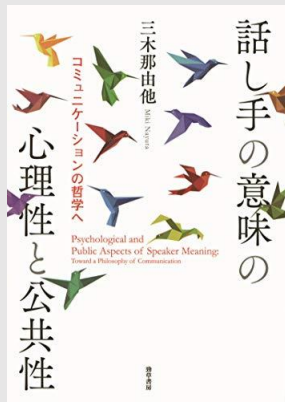
miki.nayuta.hmt@osaka-u.ac.jp

自己紹介



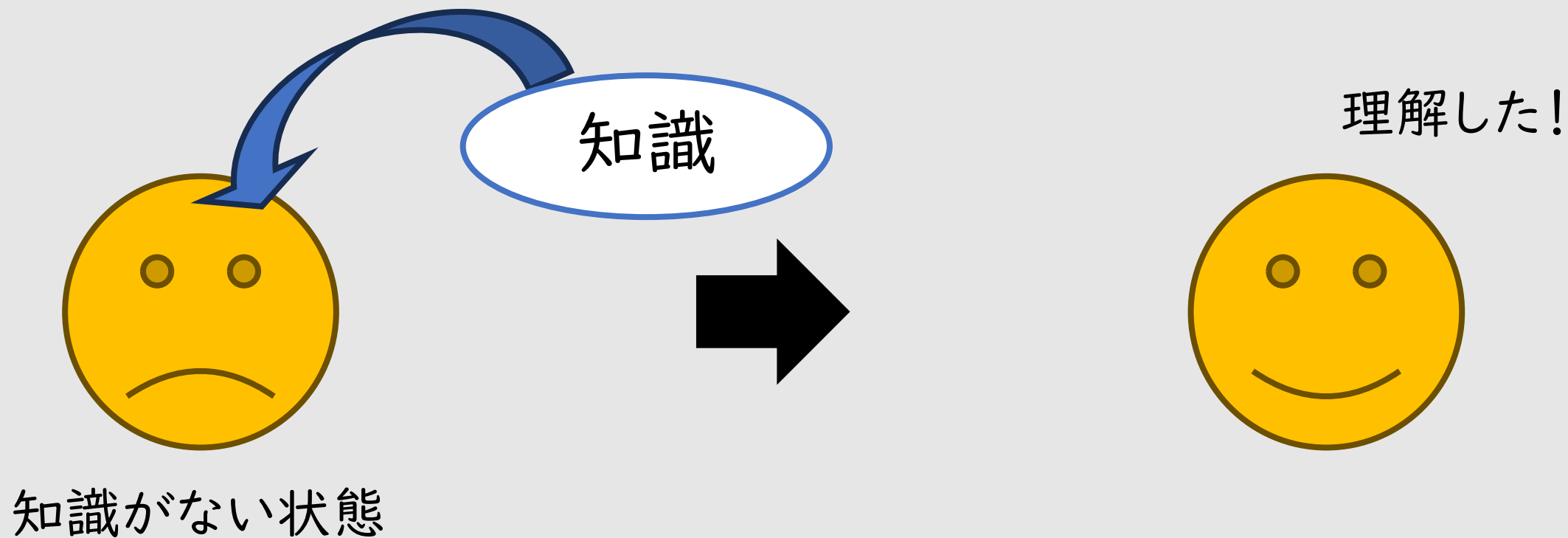
詳しい経歴等
はこちら

- 三木那由他(みきなゆた)
- 専門は分析哲学、特に言語とコミュニケーション
- 「コミュニケーションとはそもそもどういう営みなのか」をテーマにしばらく研究していた
- 最近はコミュニケーションが不当なものとなり、誰かにとって暴力的になる状況について考えている

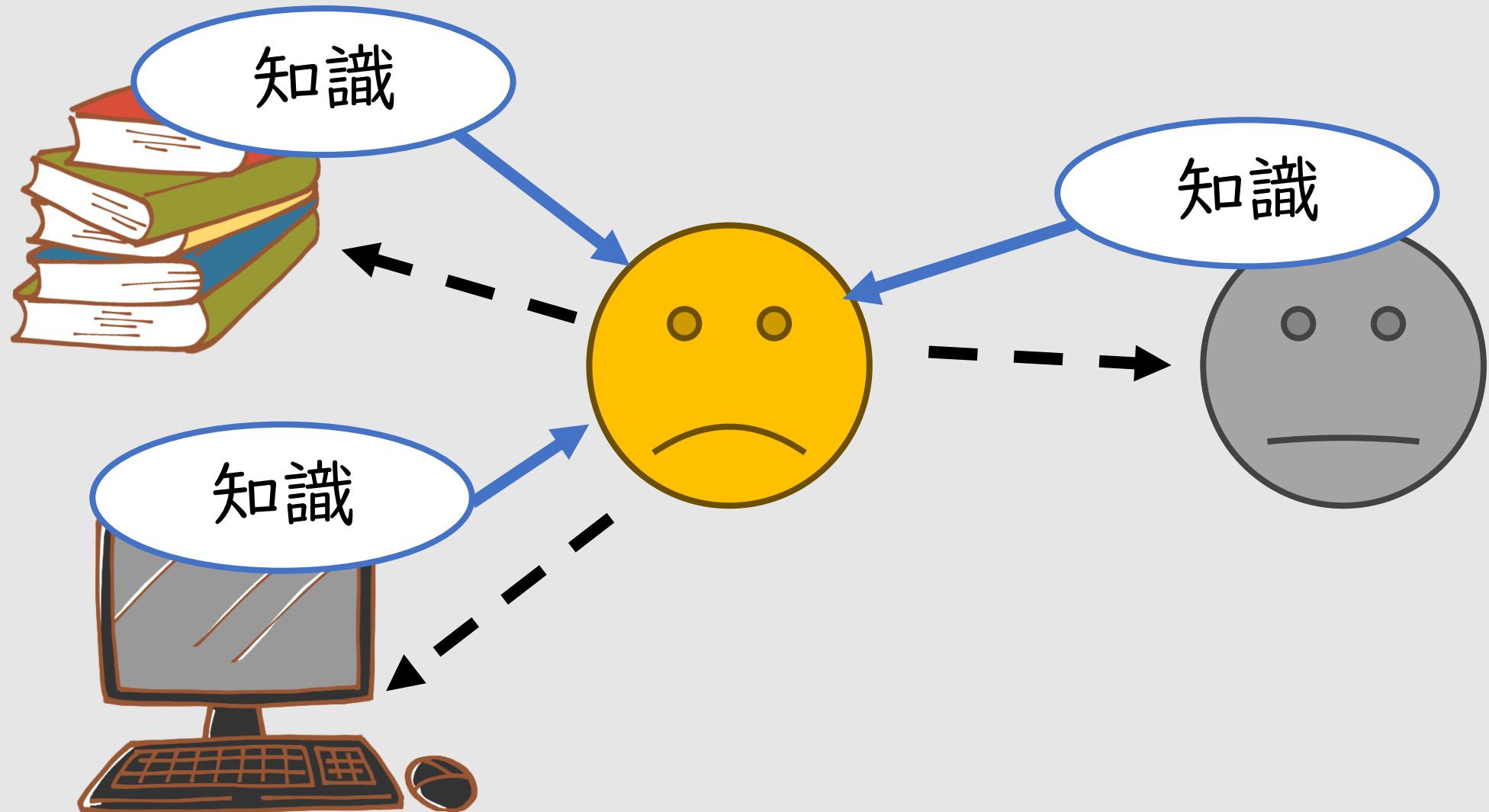


「理解」とは？

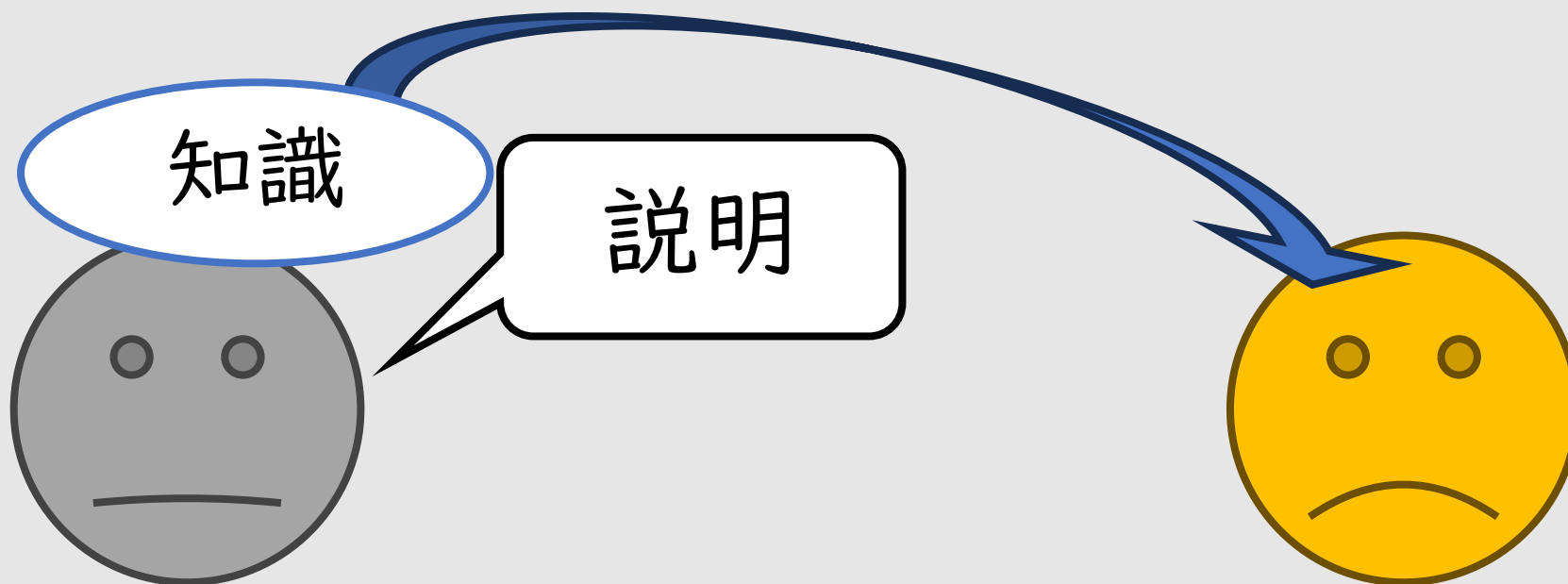
よくある見方



「理解」のためにすること



「理解」を得るためにすること



よくある見方のいくつかの前提

1. 理解とは知識を増やすことである
2. 知識とは「〇〇とは□□である」のような、言語的に伝達できる事柄である
3. マイノリティは、コミュニケーションを通じて自分たちの説明をすることで、相手に知識を伝達することができる
4. マイノリティへの理解は、3を通じて進められる

もやもやすること

- 知識だけはあるけれど、一緒にマイノリティが普通に生きられるようにために何かをしたりはまったくしてくれないひとは、本当に「理解」している？
- 「理解」のために、マイノリティ側が延々と説明を求められ続ける不合理
- 説明を聞くだけで、「理解できてよかった」と満足されても困る

よくある見方には、偏りがある

命題知(know-that)と実践知(know-how)

- 哲学では、認識論という分野で、「知識とは何?」「理解とは何?」といった議論がなされている
- そのなかで、「知識といっても命題知と実践知があるよね」という話がよくなされる(ほかにもありますが)
 - 命題知: 事実に関する知識
 - 実践知: 行為のやり方に関する知識

命題知(know-that)と実践知(know-how)

• 命題知:

- 「私はアメリカの首都がワシントンD.C.だと知っている」
- 「私はスパイダーマンがMarvelコミックのキャラクターだと知っている」
- (応用) 「私は日本の首都がどこか知っている」



• 実践知:

- 「私は自転車の乗り方を知っている」
- 「私は美味しいてんぷらの揚げ方を知っている」



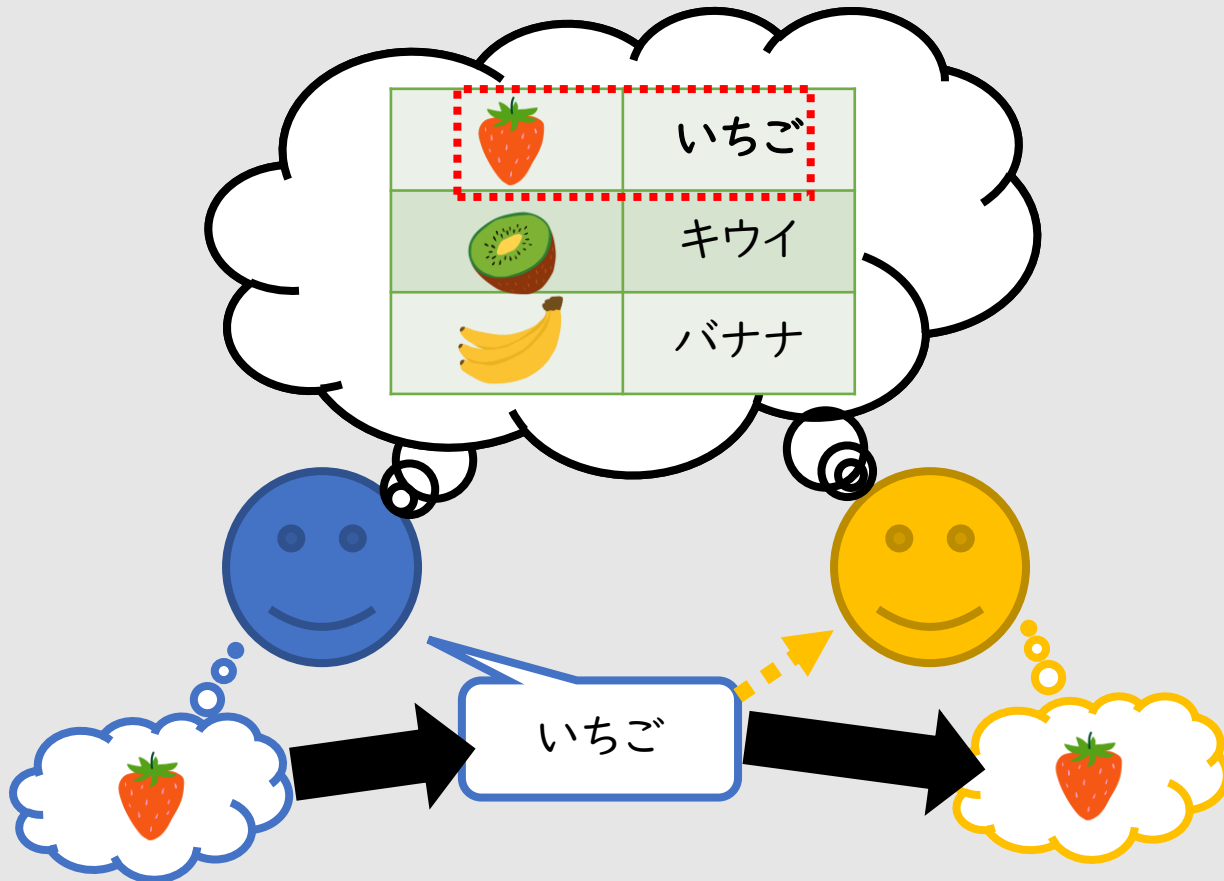
命題知(know-that)と実践知(know-how)

- 実践知は必ずしも命題知のかたちに直せないし、命題知も必ずしも実践知のかたちに直せない
- 実践知よりも命題知が基礎的という立場を「主知主義」と言うことがある
- これに対し、実践知こそ基礎的という立場を「プラグマティズム」と呼ぶ

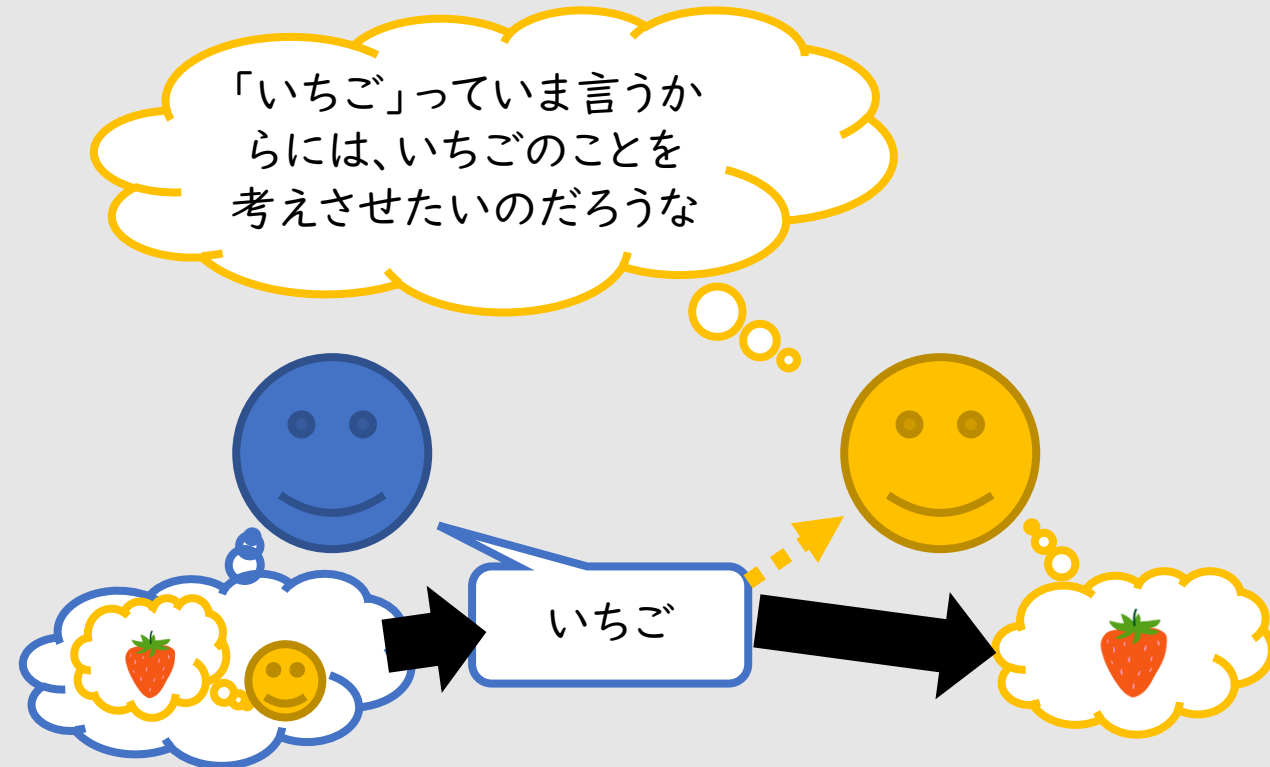
(参考:ロバート・ブランダム『プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか』)

よくあるコミュニケーション観： バケツリレー式でコミュニケーションを捉える

参考：D・スペルベル&D. ウィルソン『関連性理論』（研究社）



伝統的な見方



ポール・グライス『論理と会話』（勁草書房）

よくある見方の前提

- よくある見方は、「知識といえは命題知」という主知主義的な考え方を前提にしている
- また、「コミュニケーションは話し手の心のなかにあるものを聞き手に受け渡すこと」だとも思っている
- これらが組み合わさって、「理解するには命題知を得ればいい、そのために当事者に聞くのがいい」あるいは「当事者はそうでないひとに説明するのが理解のために大事」という話になっている

よくある見方からの脱却

私のコミュニケーション観： 「約束事」からコミュニケーションを捉える

参考：三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』（勁草書房）
三木那由他『会話を哲学する』（光文社新書）
M. Gilbert, *Joint Commitment*, OUP.



コミュニケーションを通じて、「今後どういうつもりで振る舞うか」という約束事をつくる
その約束事に反する振る舞いをしたら「嘘つき」、「真面目に話を聞いていなかった」などと
非難されることがある

コミュニケーションと知識

- コミュニケーションは、話し手の心のうちのメッセージを聞き手に伝えることというより、話し手の発話をもとにした話し手と聞き手のあいだで行為方針の調整
- つまり、ある種の実践知の形成がコミュニケーションの核にある
- プラグマティズムへ

私の提案

- マイノリティへの「理解」とは、「〇〇は□□だ」式の命題知の積み重ねではなく、その相手とともに生きる生き方を学ぶという実践知の獲得として捉えられるべき
- 実践知は一回の情報伝達で終わらず、ときには失敗しつつ根気よく訓練して身に着けるしかない（自転車の乗り方のように）
- マイノリティ側からのコミュニケーションはもちろん必要だが、それは命題知を相手に与えるというより、相手に自分とともに生きる生き方という実践知を身に着けるための機会として必要
- 生き方を変える気がないひとは、「理解」の準備も、マイノリティとのコミュニケーションの準備もできてはいない

マイノリティの「理解」とは？

- 命題知を得て満足するようなものではない
- 実際にマイノリティと一緒に過ごし、そうした人々が存在することを踏まえ、スムーズに会話や仕事をできるように自らを訓練し、そうした実践知を醸成していくことこそがマイノリティの「理解」だろう
- マイノリティに関する事柄をマイノリティ自身が語るようなコミュニケーションは、実践知醸成のための足掛かりとして試みられるべきで、命題知を与えるだけでは、必要な「理解」は得られないままに「理解した感」だけが作られてしまう

私たちは一緒に生きられているだろうか？

一緒に生きる準備ができているだろうか？

一緒に生きることを学び始められているだろうか？